

# 日本舞踊における「水」の表現

石田久美子

## 〈研究目的〉

日本の伝統文化研究者の九鬼周造は、自然を日本文化の最も基本的な特色として指摘しており、彼は著書『日本的性格』のなかで、日本文化の三つの主要な契機として自然・意気・諦念をあげ、この三者を関連づけている。なお、日本人のいわゆる自然観の一例として、世阿弥時代の能『山姥』のうちの一文をあげることができる。これは『和漢朗詠集』の大江朝綱の詩を引いたものであるが、シテ山姥は、「善悪不二、何をか恨み、何をか喜ばんや。万箇目前の境界、懸河渺々として、巖岨々たり」として、「山また山、いづれの工か青巖の形を削りなせる。水また水、誰が家にか碧潭の色を染め出せる。」とうたう。更に、伝統的な日本人の自然観の最も代表的な思惟を端的に示すものとして、晩年の世阿弥がつづった『金鳥書』があり、ここからは日本人に山川草木を観る自然観が流れていたことを認められる。また、和辻哲郎は日本の風土の特徴について「日本は蒙古シベリアの漠々たる大陸とそれよりもさらに一層漠々たる太平洋との間に介在して、きわめて変化に富む季節風にもまれているのである。…中略…かく大雨と大雪との二重の現象において日本はモンスーン域中最も特集な風土を持つのである」(『風土』)と記している。日本に齎されたこの大雨と大雪の二重の現象は、人間の生活に多大な影響を及ぼし、そこに自ずから独自の自然観が生まれたと言える。

日本舞踊は当然これらの流れを受け継ぎ、作品に繁栄させたものである。よってそのほとんどが日本の風土、気候を歌ったものであり、そこで生活を営む登場人物のキャラクターを表現するものとなっている。この表現方法として動作と振りがあるが、役柄を瞬時に観客に認知させるものは衣裳であり、これらの総合効果によって様々な特色をもつ役柄が生まれ、これらは現在、日本人の自然観を認識する上で重要な役割を果たしている。従って、日本舞踊に数多くある「水」を題材とした作品においても、役柄による独自の動作や振りが生まれ、衣裳やそこに描かれた文様も役柄独自の意味を持ち、同じ「水」の表現でも、役柄によって表出されるイメージは異なってくる。結果的にこれらはすべて日本舞踊の技法の上に成り立つものであり、そこには表現上、巧妙な計算がなされている。本研究では、この「水」を題材とした舞踊作品群を抽出し、その表現方法(動作と振り)を衣装との関連をもって考察を進め、作品に多分に組み込まれた役の性根を、日本人独自の自

然観にかかわりつつ、立証することを目的とする。

## 〈研究方法〉

- (1) 装飾作品を研究対象とし、衣装と動作との関連を探る。
- (2) 長唄21作品・清元6作品・常磐津4作品を抽出し、これらの舞踊作品に表出される「水」のイメージから、その性格・特色・意味を検討し、心象とテーマを探る。

## 〈考察と結果〉

### 【動作と振り】

#### a) 波の表現

扇を使用して表現するものに、平波・荒波・ウチアゲ波・女夫波。  
両手で表現するものに、カスミ波・引き波・カブリ波・巴波。

#### b) 雨の表現

降りだした雨に気づき雨の滴を仰ぎ見る。  
降りだした雨に気づき傘をさす。  
袖で雨を受ける、又は雨をよける。  
雨に濡れたか否かを確認する。  
雨に濡れた着物の滴を払う、又は拭う。  
雨に濡れた傘の滴を払う。  
雷の音と同時に降り出した雨に驚き怯える。  
降る雨に男女の情事を掛けて連想させる。

#### c) その他、水の表現(生活・労働)

流れる水を眺める。水面の水をすくう。  
水面に己の姿をうつす。水中を泳ぐ。  
船を漕いで、水を手前に引き寄せる。  
盥などの小道具を使用して、衣洗ひ。  
手拭い又は袖を使用して、物絞り。  
汐汲み：竿を肩に担ぎ、桶を持って水を汲み上げる(桶の紐を持つ又は袂で桶を表す)。

### 【衣装】

#### a) 衣裳の文様

波・流水・海草・波に千鳥・波に貝づくし・青海波・観世水・貝波・海ミル松・網の飛・波と葎・露芝など。

#### b) 小道具：傘・腰蓑・手拭い・桶・盥など。

以上、「水」を表す動作と振りにおいて、波の表現が主に即物的であるのに対して、雨をはじめとする殆どの表現は主に受動的である。また雨は男女の情事と掛けて連想させたり、役柄の色艶を表出するために効果的に用いることが多い。衣装においては、「水」を連想させる数多の文様を植物の図柄と共に衣裳に施したり、小道具を効果的に用いることで、作品に「水」のイメージをより強く与えている。結果的に「水」を舞台にのせるということは、「水」をテーマとする作品に限らず、舞台に潤いを与えることで作品を一層、情感豊かなものに仕上げているのである。